世田谷文学館友の会

会 報　第６３号

２０２３年６月１日

世田谷文学館友の会
〒157-0062
世田谷区南烏山 1-10-10
世田谷文学館内
FAX　03-5374-9120
ホームページ
https://setabuntomo.net/

世田谷文学館・世田谷文学館友の会共催
総会記念トーク
作家・宮部みゆき氏「私の好きな清張作品」

堀　伸雄

さる四月八日(土)、多数の来場者で埋め尽くされた一階文学サロン。ミステリー作家を代表する宮部みゆき氏をお招きし、敬愛される松本清張の魅力を語っていただいた。宮部氏は二〇二二年、第七十回菊池寛賞を受賞された。松本清張は約五十年前(第十八回)に同賞を受賞。お二人は、その守備範囲の広さと深さの点で共通する。聞き手は、長く文藝春秋に勤務された当会会長・平尾隆弘氏と「オール讀物」編集長等を歴任され宮部氏と親交の深い吉安章氏。宮部氏とは松本清張について過去数回対談をされた直木賞作家・北村薫氏もご来場。トークは、長篇『砂の器』、短篇『張込み』、『声』を中心に進行、次第に白熱化し多岐に亘る清張談義に発展。宮部氏も終始笑顔を絶やさず明るく語られた。その熱気と盛り上がりを再現できず残念だが、この三作品にまつわる部分をご紹介したい。

（文中の≪　≫部分は宮部氏のお話からの抜粋）

■『砂の器』二つの場面の朗読

吉安氏の司会により、先ず『砂の器』から。長篇『砂の器』は、著名度において清張作品の中でも一、二を争う。映画(野村芳太郎監督、一九七四年公開)も名作の誉高い。宮部氏は、年一回は読み返すほどお好きとのこと。お気に入りの二つの場面を厳選、自ら朗読された。

最初の場面は、物語の前半、東京・蒲田で発生した殺人事件の聞込みのため東北〈出張した二人の刑事(今西、吉村)が帰京する車中での会話。被害者の身元すらわからない中、唯一の手掛かりとなる東北弁「カメダ」をめぐり出張したが、確たる成果がないまま帰京。疲労感漂う中、先輩の今西が自作の句を披露。情感あふれる宮部氏の朗読。二人の刑事の厚い信頼関係と人柄が伝わる。〈清張作品における俳句〉という興味深いテーマも浮上。宮部氏は、十年ほど前から俳句に興味を持たれ、句会などに参加、吉安氏もメンバーだという。以来、この場面を新しい観点で読むようになったそうだ。因みに、宮部氏の俳句〈の関心は、近刊『ぼんぼん彩句』(角川書店)となった。

真摯に語られる宮部みゆき氏

聞き手：右・平尾隆弘氏
左・吉安 章 氏

２０２３年４月８日　於：世田谷文学館

平尾氏は、清張が俳句を愛好していた証左として、長篇『眼の壁』に使われた数句を紹介。特に、ラストで詠まれている〈幻の女(ひと)と行く夜の花八ツ手〉が印象深い。

次の朗読は、物語の中盤、ヒロインの一人・田所佐知子が、婚約者の和賀英良と一緒に日本庭園内の「湘南亭」で、父の前大臣・田所重喜と食事するシーン。結婚を控え幸せの絶頂にある佐知子の華やぐ様子を、宮部氏は明るく弾むように朗読された。

なお、次の章は一転し重苦しい場面に。もう一組の男女(関川重雄とホステス・三浦恵美子)が深夜のレストランで密会。妊娠をめぐる二人の諍い。宮部氏は、幸福感あふれる佐知子と悲運の恵美子との絵画的ともいえる日陰感の鮮やかな対比に着目された。

■さらなる魅力の数々

宮部氏は、『砂の器』に魅せられた点を語る。≪読んだのは中学か高校の頃。初出も知らないまま、新聞連載だったと知ったのは、小説家になってから。連載当時に毎日読めていたら、さぞ幸せだったのでは。ミステリーとしては、結構、突っ込みどころがあり、かなり偶然に左右されていますが、これほど読者を楽しませ、ハラハラさせる小説はなく、私も、新聞が配達されるのを外で待ってもらえるような作品を書きたいと目標にしています≫≪(犯人)和賀英良という人物は大変現代的。音楽で出世したい、認められ光り輝く和賀になりたいという欲望は、連載された当時よりも現代の方が切実にわかるのではないでしょうか。和賀を含めたヌーボーグループも、当時もモデルがあったかもしれませんが、今の方がしっくり来るのでは≫≪ラストシーンは、映画より原作の方が好き。物悲しく、空港での女性の綺麗な声の場内アナウンス。犯罪小説として、忘れがたい悲哀を込めた素晴らしい締め

方。よくお風呂場で朗読します》

平尾氏も、「紙吹雪の女」の章など、ミステリーとしては疑問を生じるところはあるものの、刑事が、スポーツシャツの切れ端を中央線沿線でしらみつぶしに探すところなどのワクワク感、そういう楽しみを清張さんは活字で与えてくれたと共感された。

■出版界全盛時代のトップランナー

昭和三十年代、週刊誌の全盛時代にトップランナーだった松本清張の仕事ぶりに話題が移り、半藤一利氏はじめ編集者と松本清張との交流の逸話が、平尾氏からユーモラスに紹介される。宮部氏は、以前、清張全集の編集担当の方を通じて、清張が最も多忙な時期のスケジュールを見せてもらったそうだ。《目が回るような連載予定でした。三人分くらいの仕事を一人でされていましたが、どの仕事も愛しておられました。小倉の記念館に残されている煙草の焼け焦げがついたクッションを見ると、拝みたくなります》

■短篇の魅力と『張込み』『声』

吉安氏は、二〇二〇年の直木賞を西條奈加氏が『心淋し川』で受賞された際、宮部氏が選考委員として発言された「主人公だけでなく、他の人物にも時間が流れている点が良い」とのコメントを紹介。宮部氏は、自分でも、特に江戸ものの短篇等を書く際に気を付けており、色々な人物や、色々な人生を描くことが短篇の魅力でもあると語る。

宮部氏は、膨大な数の短篇を、『松本清張傑作短篇コレクション(上・中・下)』(文藝春秋)、私小説的要素を含む『松本清張傑作選』(新潮社)の四冊のアンソロジーとして再生させた。

このコレクションを編むに際し、宮部氏は、三か月かけてひたすら清張の短篇を読んだ。最初に読んだ『張込み』は、有名すぎるのでこのコレクションからは外した。《高校生の頃、はじめて図書館で読んだ時は、謎解きが何もないし、わからなかった。『火の記憶』の方が子供の頃の記憶が実は事件につながっていて印象的でした。でも、自分が歳を経ると、女が犯人と過ごした日々や、この女を見守っている刑事の胸に去来するものなどがわかってきて、やはりこれは凄いと思うようになりました。原作を生かしきった映画(野村芳太郎監督、一九五八年公開)も完成度が高いです》

『声』は、新聞社の女性電話交換手が、深夜、たまたま、かけ違いで殺人犯の声を聞いてしまったことから、事件に巻き込まれてしまう話。生の声と電話の声との違いが伏線となる。宮部氏は、高校を卒業された際、資格取得の必要を感じて電話交換手の資格を取得された。そんな体験から、短篇『声』には個人的な親近感があるとのこと。平尾氏によれば、文藝春秋に代表電話があった頃は、電話交換手は全員、『声』を読んでいたそうである。

トーク終了後の質疑において、『砂の器』等清張作品に通底する〝人間の業〟に関する質問があった。宮部氏は、次のように回答された。《どの作品にも書かれていることですが、人は罪を犯してしまう。ごくごくまじめに普通に生活していた人が、何かを隠そうとか、短絡的に手に入れようとか、無理を通そうとすることが犯罪につながる。ひとつひとつは重いが、むずかしく書くのではなく、どうなるかどうなるかと、読者を引っ張るように清張さんは書いたのだと思います》

これは、松本清張作品の本質なのであろう。お三方、清張さんを振り返る機会をいただき、ありがとうございました。

(友の会会員)

新春散歩　多磨霊園散策

「人在人間、日失一日。」

野口　恒生

過日、物故作家二十四名を多磨霊園の墓所へ訪ねる「文人掃苔巡り」に参加しました。

一回目参加者は二十三名、二回目は十九名（かの記録的な大寒波の余波を受け順延繰り下げ）、本も作家も大好き、散策も、という参加者ばかり。スタッフは暑熱のなか始められた下見を含め四度目の「掃苔行」となりました。事務局がウィキペディア等で検索された作家の膨大な資料からコンパクトに手作りされた解説付き資料と、多磨霊園発行の地図を手に歩いて来ました、三時間。

武蔵野の広大な三十九万坪の敷地六万基、四十五万霊が眠る屈指の公営霊園。見取り図を手にしたところでとても行き着けない迷路のような墓所を、該博な知識と手帳を手に真摯に解説を心懸けてくださる原敏彦ガイドのもと、八甲田のように蹌踉することなく、順々に観てお参りすることが出来ました。

私が参加した二回目（繰上げで初回）一月二十九日は、一六三年前、チェホフの誕生日。『大学生』は好きな作品です。寒さこそあれ、晴れ渡った霊園内を、躓き転倒して保険適用受けることもなく、元文学少女、昔日の少年が、カルガモよろしく前になり後ろになり、「お墓巡り」堪能してきました。

大好きな作家を個々に墓所に訪ねることはあっても一筆書きで二十四名は、壮観です。三時間では少し早送り状態で、やはり健康ウォークも兼ね、次回は叶うなら午前とお昼休憩を挟み、午後にもゆっくり深遠な解説講義を受けたいと思いました。(☜)

シリーズ　世田谷とわたし　第十五回

〝人と縁に生かされて〟

中村　桂子

松林の中にある家から水着のまま海へ行けるという、子どもを育てるには絶好の湘南でしたが、都心に通うのには時間がかかり過ぎますので、長男が高校生になる時に都内への引っ越しを考えました。親が暮らす鵠沼と都心の両方に目配りして最も便利なところとして成城が浮かび上がり、以来世田谷の住人となりました。数えてみましたらもう四十年近く、一番長く暮らした場所です。

東京で生まれ育った者として、東京が経済的効率ばかり考えた高層ビルの街になっていくのが気になり、人間の暮らす街としての美しさ、楽しさを忘れたくないと思っています。その点世田谷は、緑と都会の魅力とを合わせ持つとても暮らしやすいところです。

今の住まいを選んだ決め手は富士山。西南に向けた崖の上に建つ家からは、広がる空の向こうに丹沢の山々、その先に富士山が見えます。日本人だなあと思いながら、毎朝今日はどんな富士山かなとカーテンを開くのを楽しんでいます。すばらしいのは夕暮れです。季節によって南から北へ、或いは北から南へと毎日少しずつ動く太陽が落ちると、シルエットの富士山が現れます。夕焼けが美しい日は、しばらく見とれます。太陽の動きを見ていると自然は日々動いていることが実感でき、大きな気持ちになります。最高は、なんと言ってもダイヤモンド富士で、我が家からは立春と立冬に見えるのです。本当にきれいに見えたのは数回ですが、毎年楽しみにしています。

富士山から入りましたが、この崖は武蔵野を代表する国分寺崖線、立川市から大田区まで三十キロメートル続く崖地です。我が家の辺りでは十五メートルほどの差があり、武蔵野の面影を残す緑の斜面の下には水が湧き、春になると今では珍しくなったニリンソウが可愛い花をつけます。庭に出るということは十五メートルの崖を上り降りすることですので、最近言われるバリアフリーとは程遠い環境ですが、まだ足腰に問題を感じず外出も気軽にできるのはこのおかげと感謝しています。

チョウ、トンボ、クモ、ハチ、さまざまな鳥たちと豊かな生きものの世界が広がる崖線ですが、最近少しずつ質が落ちているような気がしており、先日、大地の再生医を自称する矢野智徳さんに、土の診断と治療をお願いしました。一日かけて土の中に水と風の道を作って下さいましたので、元気になった庭で小さな手入れをしながら四季を楽しめそうです。このような環境ですと、落ち葉掃きなど自然に合わせた作業をしながら話し合うご近所の方たちとのお付き合いも楽しく、気持ちよい毎日を送っています。

区内の土地の三分の一を緑にする「みどり３３運動」がより活発になることを願いながら、「人間は生きもの」という長い間続けてきた仕事での考え方を日常に生かし、世田谷暮らしをより充実したものにしていきたいと思っています。（生命誌研究者）

執筆者紹介　著書に『生命誌の世界』（NHK出版）、『老いを愛づる』（中公新書ラクレ）、『ふつうのおんなの子のちから』（集英社）、『いのちのひろがり』（福音館）等。世田谷区在住。

（☞）個人的には岸田衿子、今日子姉妹の墓所その墓石デザインや堀辰雄・多恵夫妻の墓所、吉川英治の文机を象った墓石や、二十四名中、最年少！の中島敦の墓所、向田邦子さんの墓石に魅せられていました。

標題は中国道教の「抱朴子」から。人は世の中にあって、一日ずつ失っていく。……一歩歩むごとに、いよいよ死へ近づく。ならば死を愁えても意味がない、「天を楽しみ命（めい）を知る」天命を知った上でそのまま受け入れる「達人」の生き方を学ぶべきだと。川合康三の著書にありました。

（友の会会員）

新春散歩　東京都立多磨霊園 文人掃苔巡り風景
2023.1.29 と 2.1 開催

光をつかむとき

廻船　孝行

詩と出会う

「詩人のことばに出会いなさい」

それが萩原朔美氏からわれわれへのメッセージであったのではないだろうか。

朔美氏の講演は萩原朔太郎の『月に吠える』の初版本と普及版との違いについての話題から始まった。古本街を歩けば店の奥の奥の方に大事そうに置かれた初版本を見かけることは少なくない。とてもではないが手の届かない値付けがされたそれらの本の本当の価値を知ることができたことは、本講演における最大の収穫だろう。

『月に吠える』を一読しただけで理解できる者は多くはないはずだ。ではどのようにその難解な作品に挑めばよいのだろうか。朔美氏は初版本に着目すべきであると指摘する。なぜか。そこには詩人が本来意図した本当の世界が存在するからである。例えばタイトル。初版本ではある詩のタイトルが2行に亘っているが、普及版では1行にまとめられている。この謎を解く鍵は、本の中の空間に着目することだという。ある頁の最後のことばを読んだあとに次の頁を訪れると、同じ行、同じ場所に同じことばが並べられているのだ。ことばとことばの空間的な重なりを意図したこの作品のことを朔太郎は「詩集」ではなく「詩画集」と呼んだという。この「詩画集」のデザインは、内容の一部なのである。

一読すると無意味にも思われることばの見事なまでの空間的な重なり。これはただの偶然なのだろうか。朔美氏の答えは「ノー」である。詩人ははっきりとこうした効果を意図して演出しているのだと主張する。

詩人の意図を探る旅の始まりだ。朔美氏は『月に吠える』の中に登場する「白」という単語に注目した。この「白」という表現、至るところに散見されるのだが、どうにも「白」と表現するには合点がいかない。例えば次のような表現がある。

廣瀬川白く流れたり

さて、読者はどのように感じただろうか。白く流れる廣瀬川のイメージが頭の中に浮かんできただろうか。朔美氏の結論はこうだ。

「この「白」は何をも意味していない」

この「白」ということばに別のことばを当て嵌めてみてもその詩が成立することに朔美氏は気づいたという。従来われわれが何かを書くとき、われわれはことばとことばの意味の連なりを大切にする。しかし詩は、ことばとことばの意味のつながりを無視する、否、そうしたつながりから自身を、読者を脱却させようとするのだ。

批評家の三浦雅士は「詩は言葉が目的であり、散文は言葉が手段である」と述べているという。また、詩人の谷川俊太郎は「詩は音楽です」と話したらしい。やはり詩は、ことばとことばの意味のつながりから脱却する試みなのである。

詩と出会え！

朔美氏は詩について思索する間にその書き手である詩人という存在を再考するきっかけがあったという。それは草野心平との幼い頃の思い出に遡る。あるとき草野の背中に何か湿布のようなものを貼り付ける機会があったという。その際に朔美氏が見たのは、詩人の大きな背中に広がる大空であった。

草野の背中に見た広大な空へと旅立った朔美氏の向かう先は、勿論朔太郎という港、つまりは故郷であった。

朔太郎の詩の中には何度も「そうして」ということばが現れる。なぜこれほどまでに何度も出てくるのだろうか。意味など考えてはいけない。これは美しくリリカルで叙情的な響きをもたらすためのある種の必然なのである。

こうした意識的なことば遊びは他にもみられる。例えば次のような表現がある。

しづかにきしれ四輪馬車

声に出して読むと分かるが、これはこのことばを発声する際の口の動きが計算されている。意図的な、戦略的な音としての連なりがこの一行に現れているのである。

詩を朗読してみよう。詩を声に出して読んでみよう。朔美氏による朔太郎の詩「猫」の朗読が始まった。屋根裏でこっそりと家主を盗み見る猫たちの会話。

―ここの家の主人は病氣です―

この「猫」という詩を初めて目にしたとき、私は混乱した。一体この詩はどのような場面のことが書かれているのだろう。私は朗読を通して、音で、身体でようやくこの詩の広大な世界に近づくことができたのである。

続けて朔美氏は「天に怒る」という詩を読み上げる。ほんの数分前の私はここにはもういない。詩との出会いは既に果たされたのである。

意味からの脱却と詩

詩が意味の世界からの脱却の試みであることは既に述べた。意味の世界が「生の世界」であるとするならば、意味のない世界は「死の世界」と呼ぶことができるであろう。多くの人間と同様に朔美氏も幼少期にその「死の世界」を恐れたという。ある日朔美氏が草野心平に死について尋ねたところ、次のようなことばが返ってきた。

死んだら死んだで生きていくさ

われわれは意味の世界から逃れることはできない。たとえいつか無意味の世界に放り込まれようと、その場所で再び生を生きていくのかもしれない。

では、意味からの脱却の試み、つまりは詩には価値がないのだろうか。そんなことは決してない。詩の中のことばには意味だけではなく響きがある。その響きは幼い身体に染み込んでゆき、やがて新たなことばとして再生し、われわれを形作ってゆく。ことばは人間がつくったものであるが、同時にそのことばによって人間がつくられるのである。朔太郎が何度も郷愁を感じたであろう港が、われわれの身体の中に、魂の中に在る。詩は、その人間存在の故郷へとわれわれを導いてくれるのだ。

十一月某日
ROTH BART BARONの「月光」を聴きながら

（友の会会員）

世田谷文学館・世田谷文学館友の会共催講演
「初版本、『月に吠える』の不思議」

前橋文学館館長・萩原　朔美氏

2022年11月20日

於：世田谷文学館

《わたしの一冊》 吉田満著『戦艦大和ノ最期』
講談社文芸文庫（一九九四年八月十日発行）

糸井　久

学徒出身士官、色ヲナシテ反問ス　「君国ノタメニ散ル　ソレハ分カル　ダガ一体ソレハ、ドウイウコトトツナガッテイルノダ、俺ノ死、俺ノ生命、マタ日本全体ノ敗北、ソレヲ更ニ一般的ナ、普遍的ナ、何カ価値トイウヨウナモノニ結ビ附ケタイノダ　コレラ一切ノコトハ、一体何ノタメニアルノダ」

これは、出撃前夜士官室で涌き起きた士官同士の死生に関する激論の場で発された言葉だ。これには、海軍兵学校出身士官の主張が前提で、「国ノタメ、君ノタメニ死ヌ　ソレデイイジャナイカ　ソレ以上ニ何ガ必要ナノダ」がある。更に「貴様ハ特攻隊ノ菊水ノ『マーク』ヲ胸ニ附ケテ、天皇陛下万歳ト死ネテ、ソレデ嬉シクハナイノカ」と続く。

『戦艦大和ノ最期』は、出港→戦闘→撃沈→救助の全文が片仮名、文語体で一貫して書かれている。読み辛い文章であるが、忘れてはならない戦場記録の文学作品である。

異なった出身の士官達の対立する主張を読み、学徒出身側に心を寄せるが、兵学校出身の論議も否定できない。昭和八年頃、十五年戦争の前夜より日本社会に軍国主義的風潮が拡大し力を持ってくる。その中で育った若者には目前の死をそう信じ込むより以外なかったのだ。

政治家・軍人が戦争を決意すると若者の死が決定される。死闘の舞台に登場させられ主役を演じるのは常に若者だ。そう運命づけるのは国家が作り出す徴兵制である。

（友の会会員）

世田谷文学館友の会講演
森まゆみ氏
「林聖子――新宿のバー「風紋」の女主人」
〝風は紋を描き続ける〟

苅谷　崇之

「聖子さんを好きだったからです」

森まゆみさんは、著書『聖子　新宿の文壇ＢＡＲ「風紋」の女主人』（亜紀書房）を執筆した理由をそう語る。

森さんは、この著書をもとに、まず、聖子さんの父上であり、画家である林倭衛の半生から語り始めた。林倭衛は、アナキストの大杉栄をモデルにした《出獄の日のＯ氏》を描いた画家としてご存知の方も多いだろう。森さんは、林倭衛のフランス滞在時代の足跡を辿るため、現地に赴いて取材。まず、その仕事ぶりに驚かされた。

複雑な家庭、林倭衛の死を経て、聖子さんは十七歳で終戦を迎えた。疎開先を出た後、東京・三鷹で病身の母上、富子さんと暮らし始める。そして、書店で太宰治と再会。この時のことを題材に書かれたのが『メリイクリスマス』であり、主人公の少女のモデルが、聖子さんだと言われている作品だ。太宰は、この作品が掲載された「中央公論」を二人に「これは僕のクリスマスプレゼント」と言って、手渡した。その後、聖子さんは、太宰の紹介で新潮社で働くなど、交流を深めていく。

太宰との縁は、戦前、富子さんが新宿にあった「タイガー」というカフェに勤めていたときから。聖子さん自身も、十三歳の時に初めて会っている。

「太宰の小説を読むと、富子さんをモデルにしたのではないかと思われる女性が多く出てくる」と森さんは言う。

そして、玉川心中。太宰の入水した場所を突き止めたのは聖子さんだった。

太宰の死後、筑摩書房創立者の古田晁に誘われて筑摩書房で勤めることになる。「聖子さんの周囲にいた人の中で一番好きな人は古田晁」と語った森さんも印象的だった。豪快で、気骨があり、繊細で、人情味溢れる、懐の深い人だったようだ。

筑摩書房を退職した後、聖子さんは、銀座を中心にいくつものカフェで働き、一九六一年に「風紋」を開いた。前述した古田晁の他、檀一雄、井伏鱒二、竹内好、木山捷平、吉村昭、粕谷一希、高田宏、中上健次など、作家、画家、編集者たちを始め、多くの人々が集うバーとして約六十年あり続けた。

右・林聖子さんと
看板「風紋」（勅使河原宏氏筆）
森まゆみ氏講演より
２０２３年２月１２日　於：世田谷文学館

『聖子』は、聞き書きで構成されている。聞き書きは、「大変な労力がかかるが、その割に評価されない」と森さんは言う。しかし、「聖子さんの語りの味わいを知って欲しい」と、聞き書きにこだわった。未読の方は、ぜひその語りを味わって欲しい。

今回、僕は「風紋」の常連客の一人だったということで、この感想文の執筆依頼をいただいた。諸先輩がいる中で畏れ多かったが、折角の機会なので快諾させていただいた。

僕は当時、最年少の常連客だった。だからというわけではないが、「風紋」が閉幕することになった際、片づけを手伝った。この場を借りて、その最中にあったエピソードを一つ紹介したい。

その日の昼過ぎ、中学生ぐらいの女の子が「風紋」の扉を開いた。お父さんと一緒に、聖子さんにお話を聞きたくて広島からやってきたと言う。

女の子は用意したメモを手に、聖子さんに質問した。聖子さんは真摯に耳を傾け、丁寧に答えた。そして女の子は最後に、ある人が書いた詩を聞いてもらえないですか？　と言った。聖子さんが頷くと、朗読する女の子。朗読したあと、どう思われましたか？　と緊張気味に聞く。聖子さんが穏やかな表情を浮かべて感想を伝えたとき、女の子は涙を流した。聖子さんがどのような感想を言って、その詩は誰が書いたものなのかはわからない。ただ、聖子さんの表情が、女の子の涙が、全てを物語っていたと僕は考えている。

名だたる人たちが通った「風紋」だったが、聖子さんは名もなき僕のような人物にも、分け隔てなく接してくれた。その人柄に魅せられた人は多かった。冒頭の言葉の通り、森さんもその一人だったはずだ。

今回、森さんの講演を聞き、「風紋」の歴史はアナキスト、戦後の文学史、文化史などの研究にとっても貴重な資料になり、今後も様々な形で語り続けられるべきだと思った。その動きの一つとして、今年、「風紋」での青春期を書いた『文壇バー風紋青春記』（未知谷）を上梓したことも紹介しておく。

「風紋」は二〇一八年に、幕を閉じた。けれども、風は紋を描き続ける。そう思った一日だった。

（友の会会員）

世田谷区民ではないけれど……
〝私の読書原点〟
～ 練馬区 より～

田島　哲夫

練馬区から縁あって昨年四月より友の会に入れていただいた団塊世代の人間です。読書の原点は小学三年生の時から、毎月配本された講談社の「少年少女世界文学全集」を読み続けたことにあります。赤い造本、本文二段組を覚えておられる方も多いと思いますが、全五十巻が終了する頃は中学生になっており、子供ながらにいささかの感慨を覚えたものです。最後に配本された日本の小説に最も親しみを感じ、その後の読書傾向が決定づけられました。カタカナの名前を覚えるのは今でも苦手です。

私の父親は高校の理科系の教師でしたが、角川の「昭和文学全集」、河出の「世界文学全集」、創元社の「推理小説全集」他が揃っており、読書的雰囲気は万全でした。昭和十年版の漱石全集もありましたが、「三四郎　それから」とある背表紙を見て、姿三四郎のその後の暮らしぶりの小説かと思っていたのは十歳位の頃、長じてひと通り読みましたが、一番面白かったのは「日記 及 断片」でした。ちょっと邪道ですね。新潮文庫の延原謙訳「シャーロック・ホームズ」シリーズ全十巻を読んだら近眼になりました。

あれこれ読み散らす高校時代に最も心に残ったのは『暢気眼鏡』をはじめとする尾崎一雄の小説で、「構えず自然体で、自分の目で見る」ことは、私の思考のベースになったと思います。この頃読んだ、中勘助『銀の匙』、室生犀星『幼年時代』、三浦哲郎『忍ぶ川』は極私的抒情三部作として何度か繰り返して読んでいますが、芥川賞が百五十回目を迎えた時に、各界十五名が歴代の受賞作より三作を選ぶ企画があり、票が割れる中、『暢気眼鏡』と『忍ぶ川』の二作が同票トップになったのには「なんだかんだ小難しいことを言っても結局これだろう」とひそかに快哉を叫びました。他に、佐多稲子の短編『水』も心に残る名品です。

文学の素は「屈託」と、そのエキスとしての「うた」だと思いますが、多様化・軽量化するメディアに流れてしまいがちな人たちを視野に入れながら、文学館を単独区の事業として展開して、小説等の文学の魅力に触れる機会を提供し続けるなんてエライものだと思っております。

（友の会会員）

世田谷文学館こぼれ話 2

描くひと　谷口ジロー
コマごとに漲る表現者の矜持

世田谷文学館学芸部　小池　智子

二〇二一年度に開催した「描くひと　谷口ジロー展」（２０２１・１０・１６～２０２２・２・２７）は感染症拡大期に重なったにも関わらず二万人を超える来場者をお迎えできました。

フランスを始め、欧米からアジアまで多くの読者を誇る漫画を描いた谷口ジロー。しかし、日本での知名度は残念ながら余り高くなく、『孤独のグルメ』の原作者と伝えると「知ってる」と答えてくれても、実際に谷口作品を読んでいる人はそのうちの一部ではないかという危機感を伴って本企画は始まります。これほどの表現者を真正面から顕彰し、新しい読者を拡げたいという強い思いで、作品と著作権を管理する方々と、編集者、デザイナーはじめ谷口さんと仕事をされた才能豊かな人々の協力のもと展覧会は作られました。いみじくも、展覧会の話を聞くなりファンだと明かした知人は、「まさか『孤独のグルメ』だけじゃないよね、『事件屋稼業』は？格闘技は？犬は？山は出る？」と、畳みかけてきました。

こうした熱心な読者の期待を肝に銘じながらも、文学館側担当者の私は迷い続けました。展示構成の核に関川夏央さんとの共作で文学思想を軸に明治という「時代」を骨太に描き出した『「坊ちゃん」の時代』を据えるプランは揺るぎませんが、そのほかにも初期から絶筆まで画風は変われど揺るぎない画力をたっぷり見せたい気持ちと、原作物と並行して描かれた『犬を飼う』『歩くひと』『ふらり。』など独創的なオリジナル作を続き頁で読んでもらいたい思いとが交錯し、バランスに悩んだためです。

結果、各時期の代表的な作品の原画をできる限り並べた会場となりましたが、来観者それぞれが精緻な原画に驚嘆の声を発し、『歩くひと』に代表される緻密な構成のコマ運びで導く独自の物語性、コマ毎に力の漲る全作品から、「何でも漫画の形式にしてみたい」*と語った谷口ジローの漫画に懸ける思いを読みとり、ＳＮＳでも大勢が発信してくれました。

原作者との協働でも自作ストーリーでも最上の漫画表現で臨み、成功した作品をパターン化させず常に新しい漫画へと挑み続けた谷口ジロー。主な作品は当館ライブラリー「ほんとわ」でもお読みいただけます。是非その深い魅力に触れてください。

*『描くひと』（２０１９年、双葉社）収録のインタビューから（Ｐ．１７３　聞き手：ブノワ・ペータース）

ヨソの文学館・記念館
【高知県本山町立大原富枝文学館】

日本で一番小さな文学館。そう言われて訪れた「大原富枝文学館」で手に入れた図録には、「世界一小さな文学館」と書いてあった。

高知市から車で五十分、日本一の杉を誇るＪＲ土讃線大杉の駅よりバスで二十分。四国三郎と呼ばれる吉野川の清流のほとり、杉林と段々畑に抱かれた真っ白な旧簡易裁判所である建物は、昔の映画に出てくる田舎の小学校のようだった。

大原富枝は、大正元年生まれ、代表作である『婉という女』は土佐藩執政であった父野中兼山の失脚により四歳より四十年間幽閉されてやっと解放された野中婉の物語である。土佐藩の歴史は兼山に始まると言っても過言ではない。その峻烈な治政と有能さを恐れた政敵によって、一族郎党男子の血族が絶えるまで幽閉され続けたのである。

平成十二年の没後、吉本隆明氏による碑文に「戦後最大の女流作家」と刻まれた富枝だが、十八歳の時結核で喀血し、戦後治療薬が入ってくるまで、療養を余儀なくされる。「書くことは生きるということ」―闘病中の富枝が手に入れた自由。投稿生活により文芸誌の同人となり、昭和十三年には芥川賞の候補に、また、療養中の生活を書いた『ストマイつんぼ』で女流文学者賞受賞。

絶筆となった『草を褥に　小説牧野富太郎』は今期ＮＨＫ朝ドラ主人公のモデルでもある植物学者の物語だが、これも富太郎よりも、〝天才〟に振り回された妻の視点で描かれている。

あくまで〝女〟を書き続けた女流作家・大原富枝。人口三千二百人の小さな町の町立文学館である。

所在地　高知県長岡郡本山町本山五六八―二
電　話　〇八八七―七六―二八三七
入館料　三百円（休館日　月曜日）

（友の会会員　坂田美代子）

～～～

～こういう催しがありました～（２０２２年１１月～２０２３年４月）

月　日	講演・講座・散歩	講師・案内人
2022 年 11 月 20 日	萩原朔太郎歿後８０年 「初版本、『月に吠える』の不思議」 （文学館との共催）	萩原　朔美氏 （前橋文学館　館長）
2023 年 1 月 29 日 2 月 1 日	新春散歩 東京都立多磨霊園 文人掃苔巡り ～日本初の公園墓地、 開設１００年、 都立８霊園のなかで最も広い霊園～	原 敏彦氏 （文化遺跡探査者）
2 月 12 日	友の会講演 「林 聖子 ―― 新宿のバー「風紋」の女主人」	森 まゆみ氏 （作家）
4 月 8 日	総会記念トーク ～ 作家・宮部 みゆき氏「私の好きな清張作品」～ （文学館との共催）	宮部 みゆき氏（作家） 聞き手 吉安 章氏、平尾隆弘氏 （いずれも元文藝春秋）

エッセー「わたしの一冊」の原稿募集中！

- タイトルに本の題名（著者名・出版社名・出版年も）明記
- あなたのお名前、連絡先を明記
- 字数は六〇〇字以内（厳守）
- 文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
- 原稿はお返ししません
- 会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります
- 原稿は「友の会」に郵送かＦＡＸでご送付ください

編集後記

年々季節の進みが早く感じられます。

漸くコロナが下火になり、新しい段階に。新年度を迎えて、道行く人々の動きも活発になってきました。

友の会も脱皮すべく昨年より新しいボランティアの方々をお迎えし、それぞれが持っている経験・関心・興味などを行動に変換していただいています。ハードルは全く高くありませんので、「少し手伝ってみよう！」とお考えの方は、是非ボランティア活動にご参加ください。（世田谷区在住の方とは限りません。）

心からお待ちしています。

文学を中心に仲間と共にきっと楽しい時間になると思います‼

（森　ゆり子）